

〈公開ゼミ(最終回)〉「『障害』児・者問題試論」のご案内

**70年代半ば、初めての「車イス」学生、境屋純子さんの登場と波紋  
～現状を当時に戻って検証する**

**日時 2018年11月24日(土) 13時～17時(受付開始 12時30分)**

**場所 和光大学H棟 404号室**

**小田急線鶴川駅下車**

**①北口からスクールバス**

**②徒歩の場合、南口から徒歩 15分程度**

**発題 境屋純子(和光大学人間関係学科 1976年度入学)**

**天野誠一郎(同学科 1975年度入学)**

**松園(旧姓 辻)伸子(同大学芸術学科 1977年度入学)**

**篠原睦治(同大学人間関係学科 1973年度就職)**

〈公開ゼミ〉終了後、18時～20時 学内で交流会(会費 2,500円) どなたも歓迎。  
当日、お申し込みください。

※大学の駐車場利用希望の方は、下記宛、11月17日(土)までに、  
氏名、車種、ナンバーをお知らせ下さい。

※ノートテキングの用意をしておきます。ご希望の方は、当日、受付でお申し出ください。

※当日、会場設定などの準備をします。ご協力下さる方は、11時に、  
会場に、弁当持参のうえ、おいで下さい。

〈問い合わせ・連絡先〉

〈公開ゼミ〉世話人代表 榎本達彦 e-mail: t\_enomoto@tootc.net 携帯: 090-8345-3988

(以下、呼びかけ文、境屋さんのメッセージ、スクールバス発着所など大学への略図、時刻表、と続く)

**〈公開ゼミ〉、閉じて、開く**

ぼく(篠原)は、2009年3月に定年退職しましたが、有難いことに、そのときから今日まで、在職中に会った学生たちと、在職中の授業科目名「『障害』児・者問題試論」で〈公開ゼミ〉を企画・運営してきました。今秋で、このゼミを閉じることとしましたが、「閉じて、開く」テーマとして、冒頭題目で呼びかけることにしました。再会と新しい出会いの場で、共に考えることを願っています。周囲の友人、知人に声を掛けて下さるとうれしいです。

**「オミコシ」で行きましょう**

境屋さんは、1976年度春の入学を希望して、車イスに乗ったまま受験してきました。試験結果は合格圏に入ったのですが、合格発表は保留でした。ぼくがそのことを知り得たのは、

学科会議、教授会ででした。教員間では「障害者の学ぶ権利は当然、ただし、『車イス』学生の受け入れ態勢は大丈夫か」の慎重論と、「それを言っていたら、いま、ここでは断るほかなくなる。」「学生同士の担ぐ、担がれる関係に託して、まずは行きましょよ」といった「乱暴な、意見が真摯に交叉しました。

キャンパスに登場した境屋さんは、一年先輩の松葉杖で歩く天野君たちと出会いながら、教員・職員、学生たちに幾つもの問いかけをしていきます。大学側は、「車イス」学生を受け入れた以上、「まずは、スロープを作ろう」と考えましたが、意外なことに、境屋さんたちは、この提案を拒否します。そして、学生たちに対して、「担ぐ、担がれる」関係と呼びかけます。彼女は、「オミコシ」と呼んでいて、すでに街なかで体験していました。天野君もぼくも、別々に同様なことを思いついていたのだと、後年、知りました。

### **反バリア・フリー化からの出発、生身の者同士の肌身の関係のこだわり**

この呼びかけに共鳴する一群の学生たちが生まれていきます。そのなかで、天野君は、松葉杖を止めて、「車イス」生活を始めます。翌年度には、「大学に行きたい。そのためには、歩けなくてはならない」と言い聞かせて、ハードなりハビリ生活をしていた鈴木治郎君が、このニュースに励まされて、車イスに乗ったまま入学してきました。

和光大学には、創立（1966年）以来、障害者にも「開いた」大学として、盲人、ろう者、松葉杖で歩く者などが普通にいました。しかし、境屋さんの登場によって「ただし、『車イス』学生は無理」という、そのときまでの陥穽が顕在したのです。そして、このとき、「松葉杖」と「車イス」の太かったはずの境界は越えられたのです。振り返ってみると、それは「コロンブスの卵」的な事態だったのです。

境屋さんたちの問題提起は、今日流行りの用語で言えば、「反バリア・フリー化からの出発」でした。そして、ぼくが彼らから学んだ言葉で言えば、「生身の者同士の肌身の関係のこだわり」でした。

### **境屋さんの妊娠・出産、学生同士の「子育てゴッコ」**

在学中、境屋さんは、やはり「車イス」生活者Eくんとの間で妊娠し、出産します。「障害者が子どもを産む」ことは常識を越えていることを熟知しながら、それゆえ周到かつ大胆に「産むこと・育てる」ことを決断していくのですが、授業『『障害』児・者問題試論』でも、その過程を随時語ってくれました。出産の前後から、当時の学生たちは、男も女も応援に駆けつけています。天野君は、「ジュンペイ（境屋さんの愛称）に叱られながら、子どもになめられながら、『子育てゴッコ』だったよ」と、事ある毎に、楽しそうに回想しています。

（当時のことは、それぞれの立場から、冒頭に紹介した発題者たちが、まずは語り出します。また、境屋著『空飛ぶトラブルメーカー～「障害」者で私生子の私がいて』（教育資料出版会 1999年）、篠原編著『関係の原像を描く～「障害」元学生との対話を重ねて』（現代書館 2010年）で読むことができます。当日、購入できるように用意します。）

### **今日、障害者福祉制度は「充実」している、あのときの問いは「時代遅れ」か**

さて、70年代半ばから40年を越える歳月が流れた今日、「障害者差別解消法」が成立し（2016年）、パラリンピック・アスリートの称揚とともに、いよいよ「バリアフリー化の徹底」が叫ばれ、実施されつつあります。このことに先んじて、「障害者自立支援法」が成立し（2005年）、「障害の種類や程度、ニーズに応じた」介助（サービス）の多様化、専門職

化、事業化などが進行しています。

旧優生保護法（1948年～1996年）に基づく強制不妊手術被害者の訴訟が、母体保護法に「改正」された今日、始まっていて、政府は「救済」策を考えているようです。そして、政府が「共生社会」を喧伝する時代になっています。

今日の事態は、70年代半ばのそれとは大きく様変わりしていることは明らかです。上記で略述した境屋さんたちの暮らし方と問題提起は「時代遅れ」と言われるのでしょうか。ぼくたちは、あのときを丁寧に振り返りながら、「改正」「救済」されていく今日の事態の諸問題を見詰め直したいと思います。

先日、〈公開ゼミ〉の準備の一環として、天野君、松園さん（当時の「子育てゴッコ」のひとり）、そしてぼくは、境屋さん宅を訪ね、ベッドに横になったままの境屋さんを囲んで話し込みました。天野君は「(当時は)毎日が冒険!」、境屋さんは「毎日がチャレンジ!」と言い、二人は、声を合わせて「楽しかったねえ!」と叫びました。その文脈には、今日、「障害」者として暮らしているおふたりの生きにくさと忸怩たる思いが込められていました。同時に、「私たちの生活を『一般の人たち・社会』に伝えられるかが、私たちの課題」と元気よく結びました。当日、対面して、肉声で、語り合えるのが楽しみです。

### **いま、なぜ、「『障害』児・者問題試論」、消却のとき**

ぼくは、余りにも長きにわたって、「健常」者と「障害」者の関係性を問題化して、授業科目名を『『障害』児・者問題試論』としてきました。とはいえ、それにしても、『『障害』児・者』のくくりと強調がいよいよ気になっていきます。このゼミを閉じさせて頂くに伴って、このタイトルも消却しますが、この辺りについても、当日、語れればと願っています。どうぞ、一緒に考えて下さい。(文責 篠原睦治)

### **〈境屋純子さんのメッセージ〉和光は「共に生きる」モデルケースだった**

[70年代当時、境屋さんの家に入出入りしていた学生の一人だった松園伸子が聞き取らせていただきました。10月2日、窓から金木犀の香りが流れ込む部屋で、ベッドに横たわった境屋さんは一気に「発題」を語ってくれました。]

バリアフリーについては、全ての人にとってよい設備なんてありえないと思っている。それと同様に、全ての人に対応できる制度なんてありえないと思っている。その設備や制度を「使えない人」「利用できない人」にとっては、より生きにくくなり、障壁になると思っている。スロープやエレベータがそうだ。電動車椅子をひとりで運転できて、手でボタンが押せる人なら使えるけど、そうでなければ乗れない。設備や制度が充実することは、周りの人が「もう大丈夫」と思うってしまうことだ。「使えない人」「利用できない人」には、余計に地獄になると、私は今も思っている。

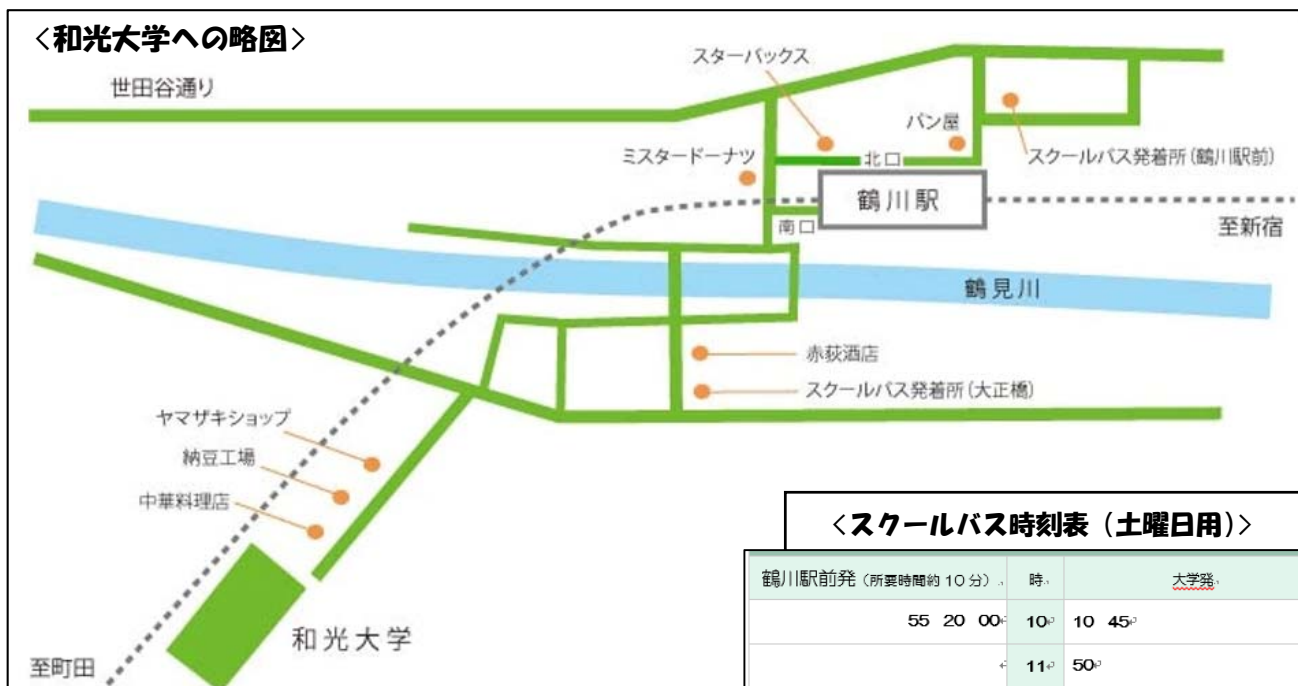
私はヘルパー制度を担ってきた立場だが、ヘルパーが一般の人との障壁になってしまうことがある。例えば私は声が大きくないから、駅などで他の人に声をかけようと思って「すみません!」と呼びかけても、ヘルパーが「なあに?」と聞いてくる。周りの人は行き過ぎていく。それは、すごいジレンマだ。

ヘルパーと、どういう関係を作っていくか。ヘルパーが、一般の人にどれだけ呼びかけられるのか。ヘルパーは一般の人に呼びかけることは仕事ではないと思っている、ヘルパー自身がやっしまえばいいと思っている。この状況を突破したいと思う。ヘルパーを含めて一

般の人に、どのように障害者問題を広げていくのかが課題だと思う。

和光のあの時代は、お互いに理解し合って、共に生きる場がどうやって作れるか、ある意味「実践の場」だった。あの中で面白かったのは、一般の学生たちも「車イスでは階段は大変だ」ということを知っていたことだ。「何か手伝えることある？」と聞いてくれた。ゼミ、サークル、運動などでの具体的な人間関係がない、一般の学生がそうしていた。

私は、あの空間が広く世間に広がって「一緒にいるよ」という認識ができ、和光の「一緒に歩く」遊歩道みたいなスロープができることはすごくいいと思う。学生同士だけでなく、篠原さんみたいな教職員たちも一緒に考えていたからできたのだと思うが、和光は「共に生きる」モデルケースだったと思う。



＜スクールバス時刻表（土曜日用）＞

鶴川駅前発（所要時間約 10 分）	時	大学発
55 20 00	10 <sup>00</sup>	10 45 <sup>00</sup>
	11 <sup>00</sup>	50 <sup>00</sup>
30 00	12 <sup>00</sup>	20 <sup>00</sup>
15	13 <sup>00</sup>	05 <sup>00</sup>
55 20	14 <sup>00</sup>	10 45 <sup>00</sup>
	15 <sup>00</sup>	55 <sup>00</sup>
35 05	16 <sup>00</sup>	25 <sup>00</sup>
20	17 <sup>00</sup>	10 <sup>00</sup>
20	18 <sup>00</sup>	10 <sup>00</sup>
大正橋発（所要時間 約 5 分）	時	大学発
30 20	10 <sup>00</sup>	15 25 <sup>00</sup>